

随筆教材のテキスト形式を生かす「習得・活用」「批評」 —「自立・協働・創造」につながる授業の開発—

佐藤 洋一* 有田 弘樹**

*教職実践講座

**愛知県春日井市立松原中学校

How to Develop the Ability of “Learning and Practical Using Criticizing” Making the Most of Japanese Essay Forms Relate Various Literature Texts —The Development of Classes “To Establish Their Selves” “To Cooperate with Other Learners” “To Create Their Mind and Option”—

Yoichi SATO* and Hiroki ARITA**

*Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Matsubara Junior High School, Kasugai 486-0803, Japan

1 はじめに—「系統的・横断的な学び」の視点—

(1) 小中高校を見据えた「学びの系統性」の視点

「第2期教育振興基本計画（答申）」では、「（変化の激しい日本社会に対応できる）生き抜く力」「自立・協働・創造」の育成，そのために必要な「21世紀にふさわしい学び（21世紀型学力）」の創造・開発が求められている。また，大学・大学院教育の質保証をめぐり，高校教育の内容やコアの見直し（高校1年生での「国語総合」が「必履修科目」に設定等），さらに，全国の高校入試制度や試験問題の内容・質の変化が今後予想されることも教育改革の一環とみることができる。

これらは，小中高校教育内容の捉え直しを迫るとともに，「系統的な」教育観（授業・評価観等），教科・活動「横断的な教育課程」の再構築の必要性を示唆するものと読むことができる（傍線は稿者，以下同じ）。

(2) 「文学的文章」の創作（書く）「言語活動例」設定

「思考力・判断力・表現力等」（活用力）育成の観点から，「言語活動の充実」を踏まえた授業開発や提案，検証・改善等が行われている。

国語科「言語活動例（書くこと）」では，「詩や短歌，俳句をつくったり，物語や随筆などを書いたりすること」（小学校高学年），「詩歌をつくったり物語などを書いたりすること」（中学校2学年），「詩歌をつくったり随筆などを書いたりすること」（高校・国語総合）等，小中から高校まで詩歌や物語・随筆等の創作（読解）指導が系統的に位置づけられたことが重要である。

これらは，論理的な言語力とは異なる表現技術や発想・認識の方法等の「言語力」育成とともに，「創造的・批評的リテラシー」（「自立・協働・創造」）の育成が，全員の子ども達に求められているためである（注1）。

2 小中高校の系統性の中での「随筆」 —随筆教材の実態と実践的な課題・混乱—

随筆はこれまでも中学高校の教材として取り上げられてきたジャンル（テキスト形式）の一つである。例えば，向田邦子「字のない葉書」（光村・東書，中2），大岡信「言葉の力」（光村，中2）等，また「枕草子」，「徒然草」，「方丈記」等の古文教材も含めると，数多く教材化されている。さらに，新教科書では随筆の創作と評価（批評）・改善等の学習が位置づけられた。

随筆を読む（書く）ことで何気ない出来事や経験等を振り返り，ものの見方・考え方の変化や成長に気づき深めさせる指導観，自由に読み取ったことをまとめさせる指導観等は，指導書で多く取り上げられている。

しかし，エピソードの内容や描写，作者（筆者）の考えの読解，音読・暗唱，文法や原典読解等に終始したり，情報を読み解き書くまでの指導過程が段階的でなかったり等，随筆教材の持つ「自由な形式？」が，かえって身につけさせる学力観や指導観・評価観を曖昧にしてきたのではないか（注2）。

本稿は，随筆のテキスト形式の解明から，随筆で身につける学力（言語力）とは何か，随筆を書く（読む）ための「習得・活用」とは何がどうなればいいのか，小中高校までの学びの系統性の中で，論理的文章や文学的文章，伝統的な言語文化等の学習や読書活動にどう関連・展開していくか等の観点から，随筆における「習得・活用」の授業開発の視点を提案するものである。

特に，新たな学力観・教育観である「21世紀型学力」（「社会を生き抜く力」，「自立・協働・創造」）育成のための授業方法・改善を，国語科ではどう考えるのかという重要実践課題の検討と提案等も論じる（文献4）。

3 「社会を生き抜く力」(自立・協働・創造)と授業開発

(1) 「社会を生き抜く力」(自立・協働・創造)の育成

「第2期教育振興基本計画(答申)」では、今後の日本社会の方向性として「成熟社会に適合した知識を基盤とした自立・協働・創造モデルとしての生涯学習社会を実現」が示され、改正教育基本法の理念を踏まえた教育再生のため、各学校段階を貫く成果目標・指標、具体的方策が「教育行政の4つの方向性」として示されている。ここには、今後の日本人の在り方を示すキーワードとして「(変化の激しい社会に対応できる)社会を生き抜く力」、「自立・協働・創造」的な学びの育成があり、そのために必要な、いわゆる「21世紀型学力」の創造、開発が求められている。

こうした背景には、戦後約63年ぶりの改正教育基本法・学校教育法等があり、巨視的には戦後教育とそのシステムを超える新たな学力観・教育観、制度改革の提言を読むことができると考えている(注1)。

(2) 新しい学力観・教育観としての「21世紀型学力」

これら提言の背後には、日本再生のビジョンが提示されていることが重要である(注3)。ここで強調されていることは「日本再生」全体のビジョンであり教育に限らない。そのため、教育に関する部分を、戦後教育システムを超える新たな学力観・教育観(教職観)、制度改革という新たなシステム論の観点から整理する。

- ①新学校教育法で新たに明記されたことを踏まえ「すべての子どもに課題解決のための自ら考え判断・行動できる『社会を生き抜く力』」の育成が強調されていること。
- ②具体的には、個々の創造性を高める、習得・活用型学力の定着化と探究、多様な人々とのコミュニケーション能力、他者と協働する社会性・人間性の実践的育成等がこれからの授業開発やカリキュラム開発のキーワードと読むことができる。
- ③さらに、「21世紀型スキル・リテラシー」開発と実践化とも言われる視点が掲げられていることが重要である。それらは「新しい価値を生み出し社会を牽引する人材や…」「既存の成功モデルを追い求めるのではなく自ら世界の課題の解決に貢献し…」「解法のない新しい問題に対しても自ら適切な対応を考え実行していく課題解決能力の育成が重要」等、多様で変化し続ける社会に対応した創造的な学び、現実社会の問題を基にした知識の「活用(思考力・判断力・表現力等)」、自ら課題解決できる力等、これまでの20世紀型学力モデル・スキルからの大きな転換が目指されている(注4、文献4・7)。
- ④公と個人の間では「社会参加を通じて社会的役割を果たし自己実現できる…」(論理的に自らの考えを表現、他者と対話する能力の向上、双方向型・協働型の新しい学びの開発等)とも明記されている。

つまり、21世紀型スキル・リテラシーとは、子ども達が互いに理解を深め合い、絶えず新たなゴールを見出し、新しい課題を自ら設定し、それらを解決しながら前進していくような創造的・協働的なプロセスを引き出すスキル・リテラシーのことである。

このような新しい学力観・教育観である「21世紀型学力(創造的・批評的リテラシー)」の開発・提案という考え方は、各答申とセットで提言されていることが重要である。こうした改善方向の背後には、これまでの各種学力調査やOECDのキー・コンピテンシー等の考え方をさらに総合化した「21世紀スキル・リテラシー」の発想が読み取れるのではないかと。

(3) 「社会を生き抜く力」(自立・協働・創造)育成と授業開発への視点—「習得・活用型学力」の明確化—

21世紀を生き抜く全ての子ども達に「社会を生き抜く力」「自立・協働・創造に向けた力」を育むために、「各種調査等で明らかとなった課題も踏まえ、自ら課題を発見し解決する力、他者と協働するためのコミュニケーション能力、物事を多様な観点から論理的に考察する力等の育成を重視」、「特に、思考力・判断力・表現力等の効果的な育成に向け、各教科等を通じた言語活動の充実を推進する」と述べられている(注1)。

これらは、言語がコミュニケーションの方法や認識・思考の形式(型)、アイデンティティ=国や民族の伝統や文化・歴史等の背景を持つという機能論の観点から、日本の子ども達の学力課題である「活用力」(主体的な課題解決能力につながる「思考力・判断力・表現力等」の学力)育成を重視していると読むことができる。

しかし、「習得・活用を重視した授業」には様々な誤解や混乱があるように思われる。例えば、「習得・活用」よりも重要なのは子ども中心の総合探究学習である、「習得・活用」は学力や学習段階ではない、あるいは「習得」は一方的な教え込み・基礎的なスキルである、子どもの意欲や主体性を軽視(無視?)した古い考え方である等との見方もあるようである。社会科や理科・算数(数学)、図工・美術、体育、英語科等では「そもそも基礎と基本等は簡単には区別できない」、「活用」とは何がどうなるのか評価できない、という意見も多いのが実情である。

以下、こうした実践上の混乱の要因を5項目に整理し、問題の所在を明らかにしておきたい。

- ①つけるべき「言語力」と「言語活動」の混乱。
- ②国語科言語力の特質と各教科の言語力の違いの不明確さ(共通部分と各教科の特性・系統性)。
- ③各教科での「習得・活用」の相互性や段階等に不明確な面があること。
- ④これらの要因が絡み合い、日本の子ども達に重要な教育課題である「活用力」の指導と支援・評価の観点の開発が依然として不十分であること。
- ⑤国語科における「論理的なレポート(報告)、批評、鑑

賞技術」「文学的な随筆、詩歌創作等の表現技術」は、実践レベルでは混乱や指導にためらいが多い現状がある（これらは理科の科学的レポートの作成・考察・推論する力、社会の調査データ報告の説得力、美術・音楽等の鑑賞文指導と評価等にも重なる部分である）。

こうした課題も踏まえて、答申が求める「社会を生き抜く力」「自立・協働・創造」的な学び（学習者主体の協働的・創造的な学び）を育成していくためにも、その一方で、「習得・活用型学力」を明確にした授業開発と評価、教科・学校全体のカリキュラム開発、各教科における系統的・段階的な指導過程論や教育技術・指導方法の再考と実践の提案が必要なのではないか。

4 随筆教材で身につけさせる学力（言語力）

—習得・活用，批評（文）—

(1) 随筆における「テキスト（表現）形式」とは？

随筆とは、見慣れた日常や何気ない経験・社会の出来事等の中から、作者（筆者）独自の感性（感じ方）や認識（見方）、考察・判断等を自由な形式で語った「短い文章や断章」というとらえ方が一般的である。

日本での随筆は、作家や詩人・科学者等の高度な見識をもった人物の、肩のこらない自由な身辺雑記の短い語りや心境報告という意味合いが強い。一方、欧米の歴史の中では、「試論」「考察の断章」という論理的な意味合いがより強い。そこで書かれる文章は、基本的には論理的な形式を持ちながら、自然現象や現実・人間関係等についての「発見と認識・批評」が独特の文体や語り、選ばれた形式で書かれることが多い。

読者は作者（筆者）独自の感性（感じ方）や認識・人間性等を、新しい発想や思考方法として「再発見」し、共感したり自分の生き方を振り返ったりしながら受け入れていく。また、結論的な「発見と認識・批評」自体の価値だけでなく、「思考のプロセス＝文体・語り」の魅力が考え方や発想のおもしろさ、課題をとらえ追究する多様な視点を教えてくれる面もある。

随筆は、文学的文章と論理的文章の2つの「テキスト（表現）形式」を合わせ持った「活用型・応用型のテキスト」ということができる。随筆は、「発見と認識・批評」（考察・判断）の前提となっている「常識」（時代の常識的な価値観や美意識等）が、学術的な論文のように明示されることなく、省略されていたり文中の一部に暗示されていることも多い。また、随筆には、大きく分けると「文学的随筆」（向田邦子や大岡信、清少納言等）と「論理的（科学的）随筆」（寺田寅彦や中谷宇吉郎等）の2つがある（詳細は「5」参照）。

(2) 随筆教材で身につけさせる学力（言語力）

—テキスト形式を生かした随筆教材の「学び方」—

全員の子ども達に随筆を読み解き書かせ、その人らしさや説得力等を評価・批評したり、交流させたりするためには、随筆のテキスト形式を生かした「習得・

活用型」授業モデル・学力モデルの開発が必要である。

随筆のテキスト形式を踏まえ、随筆教材で身につけさせる学力観（言語力と「習得」から「活用」へ）を整理すると、以下①～⑩のポイントをあげることができる。なお、伝統的な言語文化の授業化にあたっては、古典教材特有の「学び方」の観点が必要である（注5、文献5・6）。

①作者（筆者）の「主張・メッセージ」がわかる。

文学的・論理的（科学的）随筆ともに、基本的には作者（筆者）が伝えたい「主張・メッセージ（発見と認識・批評等）」がある。それがまとめて書かれている場面（段落）を囲ませたり、短いキーワードにまとめさせたりして、その意味や意義を子ども達の生活経験や実態と関連づけて考えさせることが効果的である。

これは論理的文章の結論（要点）を簡潔に読み取る方法と同じである。ただし、随筆の場合は、考察・結論が書かれている場合と書かれていない場合がある。それは、結論（主張・メッセージ）よりも個性的な「エピソード（事実の選択・構成）」自体の描写（イメージの効果や技術）がより重要で、エピソードで語って主張・メッセージは暗示して終わるような書き方もある。

②作者（筆者）の主張・メッセージの前提になっている「常識的な考え方・時代的な価値観」がわかる。

随筆は、作者（筆者）の主張・メッセージ（発見と認識・批評等）の前提になっている「常識的な考え方・美意識・時代的な価値観等」が対比的に書かれる場合と書かれない場合がある。例えば、古文の随筆では、まとめなくても当時の読者にとっては常識であるため、いきなり書き始める場合がある（これが、「随筆は作者の感性による自由な語りや形式（特に文学的随筆）」と思われる原因の一つである）。

しかし、現代から見ると「空白の前提」を理解しておかないと作者（筆者）の「主張・メッセージ」の意義がわかりにくいことがある。例えば、「春はあけぼの」（『枕草子』）は、清少納言の発見した京都・四季それぞれの美しさを語っているが、その前提には「春秋の優劣」という時代的な価値観があったこと。つまり、夏（旧暦では梅雨の季節）と冬（京都の底冷えの厳しさ）にもそれぞれ美を感じること、冬の早朝に美を見出しているように、四季の選ばれた時間帯や対象・場面（曙、鳥等）にも清少納言の個性的なメッセージが込められている。やや大げさに言えば、「感性による時代の常識（美意識）への挑戦」を語っているといえる。

授業化では、はじめは授業者がクイズ形式や選択肢等で楽しく教え、随筆の読み方の視点や『枕草子』の発想形式の「型」に気づかせる必要がある。

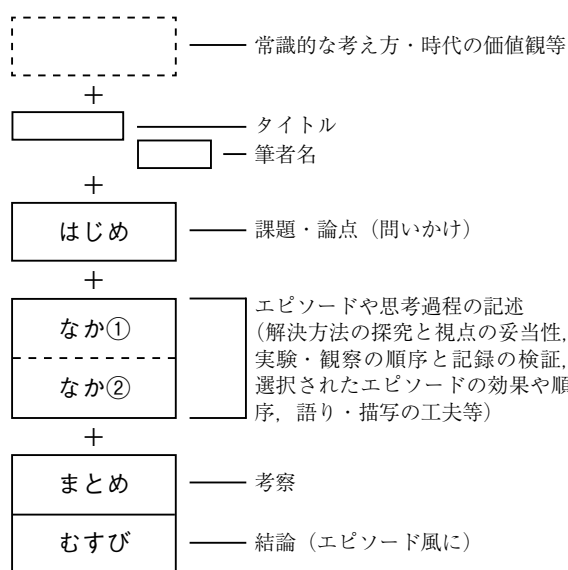
③論理的な構成の「型」の応用と工夫がわかる。

文学的・論理的（科学的）随筆はともに、論理的な構造（報告や論文型の基本的な構成）を持ちながら、

「発見と認識・批評」等を工夫された形式と独特の表現で語る特質がある。そのため、現代文や古文も含めて基本的に随筆にも構成の「型」があると考えられる。

「論理的（科学的）随筆」は個性的な発見や論理・ものの見方の面白さ等を、論文や報告の形式ではなくエピソードで語るが多い。例えば、「消しゴムはなぜ、字を消せるのか？」のように、見慣れた日常や身近な現象の中に、科学的な課題を発見し、試行錯誤しながらも解決する思考過程が具体的に語られたりする場合である（A）。

A 論理的（科学的）随筆の構成の「型」

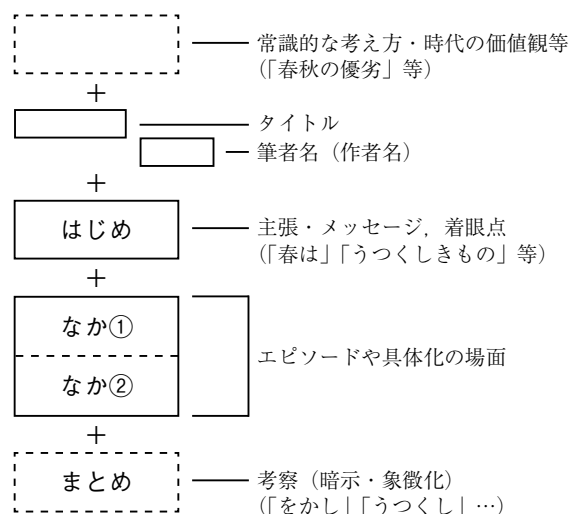


「文学的随筆」は自己の感性によってとらえられた自然の美や季節感、四季の移ろい、その中の真実等を独自の語り（詩的な描写）やエピソードで語るが多い。例えば、「月のいと明きに」（『枕草子』）のように、清少納言が特殊な状況下の中（寺社へ参拝する場合等）、自然の美の再発見（をかし）を立体的な詩的描写やエピソードで語られたりする場合である。ここには、前提として宮中の女性が夜の郊外を出歩くことは非日常的なことという当時の常識的価値観が省略されており、清少納言の鋭い観察力と描写力、知性と感性が典型的に表れた散文詩的な章段である（B）。

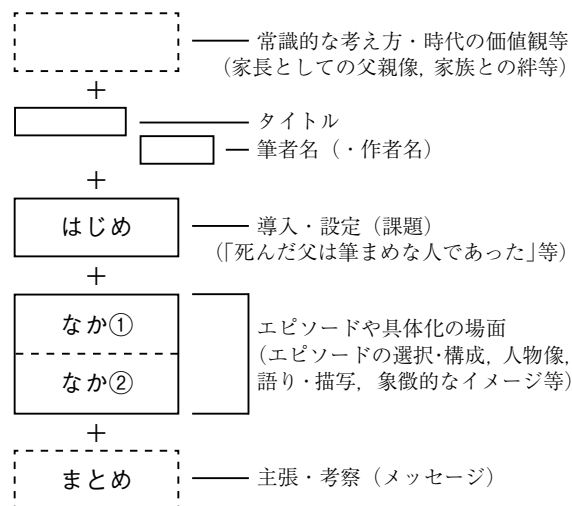
また、「字のない葉書」（向田邦子）のように、「父の（再）発見」を2つのエピソード（「作者への父の手紙」と「学童疎開中の妹の葉書」と）独自の語りで語られたりする場合である。ここには、前提として「昭和10年代の家長としての父親像（頑固で暴君だが常に家族に深い愛情と責任を持つ昔気質な父親の姿）」、「学童疎開」、「東京大空襲」等の時代背景（向田邦子が生きた時代状況や雰囲気）が省略・暗示されている。これらを一筆書きのようにいきいきと浮かび上がらせる描写力、向田邦子独特の感性やものの見方（家族や時代状

況を見る眼差しの的確さとあたたかさが、ユーモアと批評精神に貫かれていることが魅力である（C）。

B 文学的随筆の構成の「型」（『枕草子』型）



C 文学的随筆の構成の「型」（『字のない葉書』・『言葉の力』型）



論理的構成の「型」（はじめ・なか・まとめ・むすび）の理解を基礎に、どのように応用・工夫されているか、個性的な場面（段落）構成やエピソードの選択等の特質について、シンプルな「学習モデル」を例にして気づかせていくことが「学び方」の基本である。

④ 選択されたエピソードの数と順序の効果がわかる。

具体例（事実の選択・判断と表現＝エピソード）は、作者（筆者）の発想や判断の傾向・思考方法・好み等をはっきりと表すものである。ある意味では、抽象的な考察やまとめ以上に、作者（筆者）の感性（感じ方）や認識（ものの見方）等の特質を生き生きと提示する。どんなエピソードを選び（判断）、どのように構成し（構成意識）、「語る」かという情報の選択構成・判断発信の方法を理解することは、随筆学習の基本である。

短い随筆の場合、エピソードは2~3つが多い。エピソードの順序にも意味があるため、重要なエピソードは四角で囲ませたり、何のために何を語り選ばれたエピソードなのかをクイズ形式や選択肢等で楽しく考えさせることが効果的である。

⑤優れた表現やものの見方、そのための工夫がわかる。

随筆は、作者(筆者)の発見や認識・感受性等を詩的な表現や描写の技術(文学的な独特の表現)で語ることが多い。そのため、題名の付け方の工夫、冒頭のエピソードの選択の仕方、問いかけや「語り」の視点の工夫、選ばれたエピソードの効果や描写力、エピソードの順序の効果、色彩や食べ物等の象徴的な意味や効果等に、モデル学習的に気づかせていくとよい。

⑥自分の立場や興味・関心等から「自分の考え・解釈」を持つことができる。

好きな場面(段落)やエピソード、自分の生活経験や体験と関連づけられる、時代の価値観の中での作者(筆者)の主張・メッセージの意義、題名の付け方とメッセージ等、子ども達が自分の立場や興味・関心等から「自分の考え・解釈」を述べる観点をあらかじめ明示しておくことが効果的である。

⑦随筆教材のモデル(型)を生かして随筆をまとめる(創作する)ことができる(文献4)。

上記①~⑥の随筆の読み方(学び方)を生かして、随筆を書かせる(創作)。子ども達に随筆を書かせる(創作)ことで、エピソードの効果的な選択や描写の方法(語りや人物像、象徴的なイメージ等)、構成の工夫(論理的な構成の活用・応用型)といった随筆教材特有の「言語力」を身につけさせるとともに、見慣れた日常や何気ない生活経験・出来事等の中から人間関係や現実の「(再)発見」や常識的な価値観に対する「批評」に気づかせることができる(「社会性・人間性」の育成)。

授業化にあたっては、随筆教材のモデル(型)を生かしてまとめさせることが効果的である。例えば、「字のない葉書」(向田邦子)であれば、「家族・友だちの(再)発見」をテーマにして随筆を書かせる。誰について、どんな「発見」を書くのか、どんなエピソードを選び、どこを詳しく書くか(描写するか)、タイトルはどうつけるか(基本型・応用型)等について「自分の考え」を持たせ、「はじめ・なか①(エピソード①)・なか②(エピソード②)・まとめ」の論理的構成の「型」にまとめさせる。

随筆教材を情報発信モデルの一つにすることで、子ども達は再度教材に戻り、作者(筆者)の情報を選択構成・判断発信の方法を再確認することができる。また、教師は子ども達に随筆を創作させるための指導観・評価観(到達目標)を明確にすることができる。

⑧まとめられた随筆の良さや特色、改善等(批評)の視点をもつことができる。

ア. 一番伝えたいメッセージは何か。それはその人の生活経験や関心、こだわりとどうつながっているか。イ. アのために選ばれたエピソードは何か、いくつか。描写や会話、語りはどう工夫されているか。ウ. 食べ物や植物、風景(自然)、もの……等が心情や雰囲気効果を効果的に伝えるように工夫されているか。エ. 「はじめ・なか1~3・まとめ(・むすび)」の構成の型を理解し、工夫されているか。オ. 題名の付け方が読手の関心を引くように、あるいは一番伝えたいことを効果的に伝えるように工夫されているか。

⑨発表・交流・評価(批評)から、今後の生活経験やものの見方に生かすことができる。

⑧で示したア~オ、その他の視点から友だちの随筆の良さや特質を読み取り、自分の生活や人間関係との関わりから質問や意見を持つことができる。また、意見交流の中で気づいたこと(例、エピソードの持つ人間性、優れた描写力と観察力、その人らしさ、語り方の工夫にみる人柄等)を、自分の今後の生き方や考え方、ものの見方に生かすことができる。

⑩随筆の学び方の一般化・メタ認知することができる。

随筆の学び方のポイントを理解させ、他の随筆や文章を読むときの方法や評価の観点にも生かせることに気づかせることも、今後の学習や実生活、読書活動等に生きて働く大切な視点である(振り返り・一般化、メタ認知の視点)。

5 まとめにかえて

—多様なテキスト形式を生かした授業開発—

(1)「文種別・ジャンル」教材観の課題

新しい学力観に対応すべき教材・ジャンルが示されているにもかかわらず、授業実践での混乱が多い実態がある。これには、およそ3つの要因があると考えられる。

一つ目に、戦後以降根強く残る形式的な文種観による教材の見方や指導観がある(意見文・記録文・報告文・評論文等の考え方)。また「文学的文章と論理的(説明的)文章」の2大別からの教材研究が多く、その両者の特性を合わせ持つような「活用・応用型のテキスト形式」についての言及や研究が不十分であること(鑑賞・批評、伝記・ノンフィクション等)(注6)。

二つ目に教科書の手引きや指導書等でも明確に示されていないこと。三つ目に新学習指導要領「解説」でも漠然とした記述になっており、テキスト形式の特性や指導の系統性等の記述の不明確さ等があげられる。

これでは「全国学力テスト」(特に「多様なテキスト形式」の情報理解から解釈・判断・評価を問う「B問題」)に対応した指導と評価、支援等も十分にできないのではないか(注7)。

(2)「活用・応用型ジャンル」としての随筆

随筆は文学的文章と論理的文章の2つのテキスト形式を合わせ持つ「活用・応用型のジャンル」というこ

とができる。それは、基本的には論理的な構造（報告や論文型の基本的構成や枠組み）を持ちながら、作者（筆者）の「発見と認識・批評」等をエピソードの選択と場面構成、描写や象徴的なイメージといった文学的な独特の表現で語られる特質があるためである。

随筆は大きく分けると、小説家や詩人・評論家等による「文学的随筆」（向田邦子や大岡信、清少納言等）と、物理学者や数学者・科学者等による「論理的（科学的）随筆」（寺田寅彦や中谷宇吉郎等）の2つがある。

文学的随筆は、経験や感性・美意識、情緒等を自由な形式で語る部分に重点があるものである。選択されたエピソードの「描写」の技術に作者の個性的な発見や認識、詩的な感受性等の在り方が鮮明に表現される。

論理的（科学的）随筆は、発見や思考・主張を語る部分に重点があるものである。一つは見慣れた日常や身近な現象の中に、論理的な課題を発見し試行錯誤しながら解決する思考過程が具体的に語られたりする場合と、二つは実体験の感覚をもとにエピソードが構成され、論理的に詩的に語られたりする場合がある。

文学的随筆と論理的（科学的）随筆という2つのタイプ（言語構造や表現の特質）を生かした「学び方」の指導は、現象や現実・人間関係等を個性的な感性と論理性によってとらえ発信する「言語力」を身につけさせることになると考えられる。

(3) 小中高校の「系統性」の中での随筆教材

新学習指導要領には、随筆の創作指導が小学校第5～6年と中学校2年、高校1年（国語総合）に位置づけられている（次頁「資料1」参照）。ここからは、小中学校から高校までの「学びの系統性」を意識した配列を読むことができる。

随筆は文学的文章と論理的文章の2つのテキスト形式を合わせ持つ「活用・応用型のジャンル」であることから、随筆を読み解き書く（創作）、さらに子ども達が互いに交流・評価し合うためには、文学的文章と論理的文章のテキスト形式を踏まえた「習得型学力（基礎・基本の学力）」を身につけさせておく必要がある。

具体的には、文学的文章はテーマ（・メッセージ）の意義や場面構成（状況設定・出来事の発端・展開・発展・結末）、人物像や語り・描写（象徴的イメージ等）の読み方等である。論理的文章は発見・主張の価値や論理的内容構成（はじめ・なか・まとめ・むすび）、具体例の選択と記述、記録の方法、出典明示・資料の使い方（イラストやグラフ・写真等）等である。このような「言語力」を小学校低学年から中学・高校まで系統的に指導・評価していく必要がある。

随筆のテキスト形式を解明することにより、論理的文章や文学的文章、伝統的な言語文化教材等の習得型学力（基礎・基本の学力）をどの段階でどう位置づけ、指導していけばいいのかという「学びの系統性」を明確化することができる。

また、国語科学習全体における随筆学習の位置づけ、論理的文章や文学的文章等を「読む」・「書く」ことや他教科や領域・読書活動等との相互関係性も鮮明になると考えられる。

(4) 「テキスト形式」を生かした授業開発への視点

「伝統的な言語文化」の重視にもかかわらず、伝承・昔話や詩歌、物語・小説、随筆、伝記、故事成語・格言、芸能文化等の新教材の相互関係、国語科教材全体の位置づけに混乱が見られる。

限られた授業時間数の中で、小中学校・高校への「学びの系統性・横断性」を考えると、例えば古文（『枕草子』や『竹取物語』）で習得・活用させるべきことと「ごんぎつね」「海の命」「少年の日の思い出」「字のない葉書」で習得・活用させるべきことの重なりや違いを明確にしておく必要がある。「資料2」はこうした課題解明のための提案である（次頁「資料2」参照、注5・8、文献4）。

6 おわりに

—「自立・協働・創造」につながる授業開発—

小中高校の新国語科教材では「報告（説明）・鑑賞・批評（評論）（随筆）」等を正確に読み解き、判断し、自分の関心や立場等から説得力を持って書く（考察・交流・創造・批評）学力を、全員の子ども達に系統的に指導・評価することが重視されている。

そのため、「習得（基礎・基本の学力）」から「活用（・探究）」への指導過程論は、子どもにも教師にも評価観（到達目標）を明確にさせる系統的な指導構想の基礎といえる。

「活用・応用型テキスト」である随筆教材を読み解き書く（創作）、さらに交流・評価し合う学習は、「創造的な」活用力、探究力、課題解決能力や豊かな表現力（対象の見方や分析・考察の多様性）等を身につけさせることが可能である。そのためには、「活用型学力」育成のための「習得型学力」をどの段階でどのように位置づけ、さらに指導していくのかを明確にしておく必要がある。

テキスト形式における「習得」から「活用（・探究）」へ、「自分の考えの形成（解釈・判断）」から「評価・批評する＝創造的な学びの基盤」への学びを再構成することが、複雑多様で変化の激しい社会の中で「自立・協働・創造」的な学びと生き方の基盤を指導することになると考えられる（文献5を参照）。

なお、紙面の都合上、随筆教材のテキスト形式を生かした具体的な授業モデルまで提案することができなかった。随筆教材を例にした「習得」から「活用」までの指導過程論や学習シートの開発・提案、実践研究の考察・検証等については別稿で論ずることとしたい（文献7）。

[B 書くこと]※物語や随筆等の創作の位置づけ(発達段階、学びの系統性)

学校段階 学年段階	小学校		中学校		高校	
	第3～4学年	第5～6学年	1学年	2学年	3学年 国語総合	
言語活動例 (文学的文章)	ア 身近なこと、想像したことなどを基に、詩をつくったり、物語を書いたりすること。	ア 経験したこと、想像したことなどを基に、詩や短歌、俳句をつくったり、物語や随筆などを書いたりすること。	ア 関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと。	ア 表現の仕方を工夫して、詩歌をつくったり物語などを書いたりすること。	ア 関心のある事柄について批評する文章を書くこと。	ア 情景や心情の描写を取り入れて、詩歌をつくったり随筆などを書いたりすること。
系統性	※詩・物語の創作	※詩歌・物語・随筆等の創作	※鑑賞文	※詩歌・物語・随筆等の創作	※批評文	※詩歌・物語・随筆等の創作

言語活動例 (論理的文章)	イ 疑問に思ったことを調べて、報告する文章を書いたり、学級新聞などに表したりすること。 ウ 収集した資料を効果的に使い、説明する文章などを書くこと。	イ 自分の課題について調べ、意見を記述した文章などを活動や報告した文章などを書いたり編集したりすること。 ウ 事物のよさを多くの人に伝えるための文章を書くこと。	イ 図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。	イ 多様な考えができる事柄について、立場を決めて意見を述べる文章を書くこと。	イ 目的に応じて様々な文章などを集め、工夫して編集すること。	イ 出典を明示して文章や図表などを引用し、説明や意見文などを書くこと。 【現代文B】 エ 文章を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果をまとめて発表したり報告書や論文集などに編集したりすること。
系統性	※報告文 ※説明文(非言語情報(資料等)の活用)	※意見文・報告文 ※批評文(評価する文章?)	※説明文・記録文(非言語情報(図表等)の活用)	※意見文	※テキスト(表現)形式の活用	※説明文・意見文(非言語情報(出典・図表等)の活用) ※報告書・論文集等

[C 読むこと]※物語や随筆等の位置づけ(発達段階、学びの系統性)

学校段階 学年段階	小学校		中学校		高校	
	第3～4学年	第5～6学年	1学年	2学年	3学年 国語総合	
文章の解釈 (文学的文章)	ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。	エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめる。	ウ 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。	イ 文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。	イ 文章の論理の展開の仕方、場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立てること。	ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。 (テキスト形式)【表現に即した理解】 ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。
言語活動例 (文学的文章)	ア 物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。	ア 伝記を読み、自分の生き方について考えること。	ア 様々な種類の文章を音読したり朗読したりすること。	ア 詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流する。	ア 物語や小説などを読んで批評すること。	ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。 エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。
系統性	※物語・詩…感想をもつ	※伝記…生き方を考える	※テキスト形式…音読・朗読	※詩歌・物語など…内容・表現の仕方について感想をもつ	※物語・小説など…批評する	※脚本づくり、物語の書き換え(古典) ※テキスト形式…批評する

資料2 「テキスト（表現）形式」と「伝統的な言語文化（古典）」授業開発【佐藤洋一試案】（2011年11月）・注5

作品ジャンル 伝統・近現代文化	作品・教材例 古代～近現代	テキスト（表現）形式の特色	到達目標（評価規準）， 説明文・文学教材の関係性	指導の系統性 幼稚園，小中高校
神話 伝承（民話）・ 昔話	・古事記、日本書紀 ・かさこ地蔵、大きなかぶ、三年とうげ、木かげにごろり等 ・聖書やユウカラ等の世界の神話・伝説、伝承	1 国家や民族の成立と歴史 2 古代の英雄物語（神話） 3 民族の知恵や文化、記録 4 無名の民衆の知恵や生き方、論理等の表現（伝承） 5 個人の「神話」創造と現代	1 テーマの理解 2 人物像の象徴的な意味 3 構成・ストーリー展開、面白さとメッセージ 4 自分の考え・解釈を持つ（文学・説明文との重なり）	幼稚園， 小学校1・2年～ （小学校3～中学， 高校へ深化発展） ・「いなばの白うさぎ」「河鹿の屏風」
詩歌 和歌（短歌）・ 俳句 （紀行文）	・万葉集、古今・新古今和歌集等の詩歌集 ・百人一首 ・漢詩（杜甫、李白、白居易） ・奥の細道（俳句） 歴史・記録としての詩歌生の輝き、瞬間の表現	1 感動、祈りの集中的表現（叙情詩、叙事詩、劇詩） 2 自然・恋愛・死者への追悼離別、為政者賛美、歴史や運命、貧困等のテーマ 3 限定された音数律、リズムと形式、3音4音の組み合わせによる五七調・七五調	1 読む楽しさと発見、共有 2 読み方のモデルと方法 3 テーマ（感動の中心）の理解と自分の経験、解釈 4 優れた表現技術や形式の（描写や語り、構成他） 5 自分の経験や既知の情報 6 自分の考え・解釈	幼稚園， 小学校1・2年～ 小学校3～6年 中学・高校 ・古代和歌、古今和歌集（感性・美意識、自然観の型） ・漢詩（漢文脈型）
物語・小説 （歌物語）	・源氏物語、竹取物語 ・伊勢物語、大和物語（平家物語） 古代物語の枠組み、貴族社会における心理小説（宮廷小説）から市民社会（近代小説）へ	1 フィクションによる創造（宮廷小説、心理と真実） 2 永遠の真実と描写、語り、構成による人間批評 3 「歌」＝感動や関係表現のエッセンス、語りとの組み合わせによる「歌物語」	1 物語（創作童話）と小説の読み方の違いの理解「ごんぎつね」と「海の命」 2 語り手（報告者、中心人物）の役割と効果の理解魯迅「故郷」他 3 主体的な読書力の育成	（幼稚園，低学年） 小学校3～6年， 中学・高校へ深化発展 ・「故郷」「蟬の声」「握手」「竹取物語」「平家物語」等
随筆・エッセイ （日記） （紀行文）	・枕草子、徒然草 ・蜻蛉日記、和泉式部日記等の日記文学 ・奥の細道（紀行） ・エッセーやパンセ等「思考・考察の断片」としての随筆（論理的思考の型）、文学的感性的随筆の2タイプ	1 「論理的な思考・考察の断片（試論）」としての随筆 2 文学的感性的随筆と論理的記録的な随筆の2つの随筆型がある、特質を踏まえた指導 3 記録、分析、主張と描写、エピソード、語り、構成等の言語技術と効果の理解 4 自分でエッセイを書く、固有な経験・感受性を描写と語り、エピソードで構成	1 文学的文章と論理的文章の2つの特性を持つジャンル 2 構成の枠組みは論理的、エピソードの選択と構成、描写や語りは文学的技術 3 向田邦子が学習モデルになる。「字のないはがき」「ごはん」等 4 前提となる「常識的価値観」（ものの見方、感受性の型）と対比的な批評文	小学校3～6年， 中学・高校 ・随筆教材「春はあけほの」「高名の木登り」他 ・芭蕉（紀行文と自然観、感受性） ・大岡信「言葉の力」 ・論理的（科学的）随筆（寺田寅彦他） ・高校の随筆・論説「水の東西」他
記録、伝記、 ノンフィクション、 歴史	・方丈記 ・平家物語等の記録（大鏡）等 ・史記、論語（言行録） ・障害や難病を持った方の生きた記録と伝記	1 事実・生き方の記録と表現 2 歴史の証言とメッセージ、状況と人間性の真実 3 20世紀におけるドキュメンタリー、ルポルタージュ、フォトエッセイ等	1 身近な家族や友達の中に「輝かしい生」を発見 2 歴史的な偉人の伝記教材「手塚治虫・伊能忠敬・宮澤賢治」等の増加と授業化 3 生き方・価値観の育成	小学校4～6年， 中学・高校 ・「扇の的」「敦盛の最後」等（『平家物語』） ・『論語』『史記』
故事、格言	・故事成語、ことわざ、いろはうた、慣用句（百人一首）等 ・マザーグース他	1 日本人の発想、思考の形式（型）、和文脈と漢文脈 2 リズムへの親しみ、言語とコミュニケーション力等	1 楽しく生かし方を教える（語彙力、思考力を育てる） 2 生き方の型や感受性 3 読書力や判断力へ	幼稚園， 小学校1・2年～ 小学校3～6年， 中学・高校
演劇（落語、茶道） 芸能文化	・歌舞伎、能、狂言、（落語、茶道、華道） ・シェークスピア他	1 庶民向けの人生の教科書 2 「型」による思考・関係 ・生き方の表現形式の一つ	1 親しめと読み解き方を 2 日本人独自の「型」 3 身体感覚と動き、笑い他	小学校3～6年， 中学・高校 ・「柿山伏」「附子」他

〈注 記〉

- 1 中央教育審議会「第2期教育振興基本計画(答申)」(2013年4月), 同「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(2012年8月), 同「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(同)。
- 2 三浦和尚「27. 随筆, 随想, 紀行」(日本国語教育学会編『国語教育総合事典』朝倉書店2011年12月), 大田勝司「随筆・随想」(大槻和夫編『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書2001年5月), 前田眞澄「小学校高学年において随筆・意見文を書かせる際に留意しておきたいこと」(第76回日本国語教育学会・配布資料2013年8月)等。
- 3 文部科学省「人材イノベーションによる日本再生の実現について」(2012年4月)。
- 4 ATC21S (Assessment and Teaching of 21ST Century Skills) のDWF (Draft White Paper) (米国サンディエゴ2009年4月), 三宅ほなみ「21世紀型スキルを育てる」(日本工学会科学技術人材育成コンソーシアム2011年), 「21世紀にふさわしい学び(EDGE別冊)」(マイクロソフト2011年), 米国学術研究推進会議編『授業を変える』(北大路書房2007年)等。
- 5 佐藤洋一・有田弘樹「伝統文化(古典)における『習得・活用』の授業開発—『竹取物語』のテキスト形式をめぐる—」(『愛知教育大学研究報告(教育科学編)第61輯』2012年3月)。
- 6 国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』(明治図書1993年), 大槻和夫編『国語科重要用語300の基礎知識』(同2001年5月), 日本国語教育学会編『国語教育総合事典』(朝倉書店2011年12月)他。
- 7 「平成25年度全国学力・学習状況調査『解説資料小・中学校国語』」(国立教育政策研究所・教育課程センター2013年4月)。
- 8 佐藤洋一「テキスト形式解明からの『伝統的な言語文化』授業開発」(日本言語技術教育学会編『言語技術教育21—新教材・伝統的な言語文化をどう授業化するか—』明治図書2012年3月)。
- 9 草子』(学習研究所2001年7月)他。
- 3 『ビギナーズ・クラシックス 徒然草』(角川学芸出版2002年1月), 斎藤孝『古典力』(岩波書店2012年10月), 同『使える! 『徒然草』』(PHP研究所2005年3月), 永積安明『徒然草を読む』(岩波書店1982年3月), 大野芳『吉田兼好とは誰だったのか』(幻冬舎2013年5月)。
- 4 佐藤洋一「批評的・創造的な『言語力』を育成する国語科・教材開発」(日本教材学会設立25周年記念研究発表大会・研究発表論文集2013年10月19～20日), 同「全教科・活動の中核としての『国語科習得・活用型学力』の開発と授業—21世紀型スキル(学びと評価のリテラシー)の再構築—」(『国文学言語と文芸 第129号』国文学言語と文芸の会2013年3月), 同「『思考力・判断力・表現力等』の学力育成・評価からの教育方法・授業改善—報告・鑑賞・批評(言語力)による学びの『自立・協働・創造モデル』へ—」(平成25年度日本教育大学協会研究集会(北海道大会)・研究発表論文集2013年10月5日)他。
- 5 佐藤洋一「『字のないはがき』の発信学習(上)(下)—エッセイ(随筆)の「学び方」と生きる力—」(『教育科学国語教育』明治図書2001年12月～2002年1月), 同「『随筆』を読む(書く)の習得から活用への評価」(『同臨時増刊—国語科の習得・活用をどう評価・評定するか—』同2010年7月)。
- 6 蔭山江梨子「中学・高校における古典指導の開発」(『同臨時増刊—戦後教育観からの脱皮, 国語科をどう変えるか—』同2009年5月), 同「文学的随筆(エッセイ)を読む魅力と言語技術」(日本言語技術教育学会編『言語技術教育21—新教材・伝統的な言語文化をどう授業化するか—』同2013年3月), 左近妙子「随筆を『発信』のために読み解く」(『教育科学国語教育』2003年11月), 中島礼子・今井成司『楽しい随筆の授業』(日本標準2011年8月)。
- 7 有田弘樹「生き方・判断力を鍛える『伝統的な言語文化』授業開発(『平家物語』)」(第123回全国大学国語教育学会(富山大会)・研究発表論文集2012年10月27～28日), 同「随筆教材の『テキスト形式』に着目した教材研究への視点」(第125回全国大学国語教育学会(広島大会)・研究発表論文集2013年10月26～27日), 佐藤洋一・同「生き方・判断力を鍛える『伝統的な言語文化』授業開発—『平家物語』(中学二年)の『習得・活用(読書レポート)』を例に—」(『愛知教育大学研究報告(教育科学編)第62輯』2013年3月)他。

(2013年9月24日受理)

〈主な参考文献〉

- 1 吉田精一『随筆入門』(新潮社1965年12月), 井上俊夫『エッセイ・随筆の本格的な書き方』(大阪書籍1988年9月), 日本エッセイスト・クラブ編『エッセイの書き方』(岩波書店1999年2月)他。
- 2 『ビギナーズ・クラシックス 枕草子』(角川学芸出版2001年7月), 渡辺実『枕草子(古典講読シリーズ)』(岩波書店1992年8月), 同『平安朝文章史』(筑摩書房2000年11月), 小池清治『「源氏物語」と「枕草子」』(PHP研究所2008年11月), 赤塚不二夫『枕